



宗紙箱

海鏡紀行

全

伊地知文庫
文庫20
417

伊地知文庫
文庫20
417



瓶意紀行

宗祇



二毛のむら 六十れ

とらうちうたにあら一をらよひまは入深草

のりあははゆひひるまうとあれうま

あゆむらけききまうとらうちゆくあ

うつの中よりまはあまうとまあまの衣

あひまをまうとゆらまうとまあまの衣

あまうちうとゆらまうとまあまの衣

入さうらうと白海乃雲乃都うとまあま

とまあまの衣うとまあまの衣うとまあま

のまあまの衣うとまあまの衣うとまあま

あまあまの衣うとまあまの衣うとまあま

あまあまの衣うとまあまの衣うとまあま

賈山

をみこくゆりしとたのふるはよな事此の
かきしとくきちあらりけしとて海の玉乃
珠のたまをくとたのふるはよな事此の
種もく博多の海もなるとさゆりてさ
思ひにいしとていさかなたおれうとあら
ぬきよ又の十二のお正月はとての国は
ひそといふりていりてあまもたしとあのおのむ
あるしわりて陸の事もた家のあまけもさき
ありておれし時とあまひもさきもあま
まのよお日なりりてとせぬとてさりぬ事
松生のねまけけとせぬとてさき借りけ
あまともあらりてとていさかなたおれうとあら
正徳とあまの事をいひてさきとてさき
とりなせりてとていさかなたおれうとあら
しとてこのまらんとていさかなたおれうとあら
あまのこのまらんとていさかなたおれうとあら
しけさるはとていさかなたおれうとあら
うありてとていさかなたおれうとあら
むむ波傳の巻のまらんとていさかなたおれうとあら
あまのまらんとていさかなたおれうとあら
事おの中おちけけいさかなたおれうとあら
白ひあひりけいさかなたおれうとあら
あまのまらんとていさかなたおれうとあら
あまのまらんとていさかなたおれうとあら
あまのまらんとていさかなたおれうとあら

常務の院をわたりしまやうふてしつゝあま
えりしきしてあまけさ海くまのさきお出る
朽陶尾法も弘薩肉を孫七薩道りあるま
ゆと法らねいしゆと急ありのしきむかくて
さり給ふ西屋一村あり津の市さうたよ
川あり色海はくかひりて物さひしつゝあま
池もひくさきやと院ありまやあふまやうのま
うちたありしきや川と鈔の給ふ門目下總管
能秀給ふりまきや免之系もかんとんお
しもそりきこりり付ぬまきこくうちそりき
ゆらあいの鎌屋のうらまは物門のうらまは人
あふりし常務のゆり給ふねくあふりしつゝあ
うちらひしきこりし物法堂のひかしてしつゝあ
まのしきりしつゝあ給のまらねかきまよ小松
村まてしつゝあ神もやと大なる石よ其神は
まらありの勢む周防長門の境をひりそれ
らり山岸しつゝああまやまひつゝあ給のま
けまよせしきりしつゝあ柳あり庭ろありて
あまきかきつゝあ夕日おくれの程松まらま
かりしきりしつゝああまらつゝあ七日の
あまきかきつゝああまらつゝああまらつゝあ
ゆりしきりしつゝああまらつゝああまらつゝあ
流きあふりしつゝああまらつゝああまらつゝあ
うちらひしきりしつゝああまらつゝああまらつゝあ

人ぞをそふあまのあつ海をせりりてはたけの
れと居りつて潮風はけまらるるもあまの海は
のうらみけけけけけけけけけけけけけけけけ
神は満千は玉とやいふこの海とてらるる
かまの人の志とていけむ若くはさし
初念とてらりけりふふふふふふふふふふ
の會はるる量浦とてらるる
雅極文とて言ふたもまた神を別對面して
神文の指さるること難ひとや卒とてふふ
又してあまの神徳のふさふさも別りて
神徳とておろけける社系は幸あまの日の
そまはたとけ日とてらるる
れりしは神は海のとてあまの海とてらるる

月より三の夕波さむの海

明れをたふし神事ありて神国のあまの
うらみけけけけけけけけけけけけけけけけ
横門圓廊ひらりけりて神徳のふさふさ
文の海のこもりけりてあまの海とてらるる
と志りけりてあまの海とてらるる
神切神文 神事とて言ふ仁徳天皇
以上四段ありてまた神事とて言ふ
一府ありてあまの海とて言ふ
尚社といふ海とて言ふ
佐名よ明神律師徳たよりまのこもり

神さひて本海と松のひまき力も志こふや
神も田麻しむりて多めぬおむとさ
り
作色と

松風やうも神代の松の都

この言ふといふ詞もよかりつさし結成の神の
西の才一任名の神次ハ情大菩薩言ふ大の神
神功皇后神務の神ことよの柱あり和光の
いさよおあうまの侍もわくまをそ任名の神の
文武とちりけつりけたハお徳と
と治む人の出の神の心を説きし
そ是の侍りかくそ赤ら言ふとやよと
いころ極の地さうひまれとく者に神のよ

かろそこの道門と隔てむらひのを前のおあり
そのあひこ十金町とこ也け地のやりのい何海院も
とつらうらうまよいさく教をそとてあつら
いさかういせきいらみまのたよあつらつた境
よそ思ふよと松の神も物なりとあま
おほひ朝よめり神堂ハ星野はりして松皮
新くやあれたるも中くあふし結成社
の能りさぬとももふあつて風並とあつら
門目見松のそむらひよんそおの海水とあむ
はりあ徳と言乃神堂と又侍れはれと
三流とあふれひまけてあそひとらる
見そとおれたる海も物もつらあれ自ひ

のりの実きとつるも唯今れあふれあひ
ゆらあふ乃橋よそ舎あり舞ち

あふんとして音と追従るは為成

翌日又門廻り絶ち絶ちの舎をそふあり

うんしせら実よ実りしは為成

ゆらあふ乃橋よそ舎あり舞ち
のれ石の橋とのありてこれと扱ふれ舎
海はつよけつあり大木の岩松山陰は深り
少社とやひやみして常盤木たう夜ありあひ
夕雲志強くうらあひくさむしせら非の形
ふむ蒼葉の玉乃えさふやうひぬくし
うんしせら実よ実りしは為成

妹とてし一船のうらあひくさむし

快とめてし絶ち絶ちのりらよ河野しと
ゆらあふ乃橋よそ舎あり舞ち
安徳とての祈え乃絶ちとあえさし柳の浦と
菊のうらあひくさむしせら非の形
うらあひくさむしせら非の形

絶ち絶ちのうらあひくさむし

ゆらあふ乃橋よそ舎あり舞ち
あふんとして音と追従るは為成
わらあふ乃橋よそ舎あり舞ち
うらあひくさむしせら非の形
うらあひくさむしせら非の形

この二人の將軍をなれ人なれば
物ごとく海やうりて矢この舟りあはせ
わいこの海きこのさうりさもひやうあはせ
かきありさ一丈の月の光もさあはせ
十の秋さねとて海をよ

花やふと青時ぬれ林の月

めれと海濱の舟さあひはせとさうりあはせ
こやれ雲とりのあふして舟れ物と結ぶ曉
ちりきと雲よ雅となれおとと天祥と名あ
あまきと布りしあはせとさうりあはせ
別日行よおれとさうりあはせ
神の算物あるやととたあしとさうりあはせ

奇獲新 陶中勢お捕れ給ふ御侍の
福院よやうりて人の日波鼓あしてさうり
の心さしりのおはせとさうりあはせ
あはせとさうりあはせ

おろくえの御の事さの林の花

け國の身代なれと百姓の堂院とあはせ
のこあしひひのものとさうりあはせ
このあしひひのものとさうりあはせ
あはせとさうりあはせ
うりのあしひひのものとさうりあはせ
あはせとさうりあはせ
あはせとさうりあはせ

尚社の延張りて此より事創ありとてなむ
別荘一多敷も古井はらまへて心ひきまて
看後おろしむる名をて此神のらるるを
おれりやう一西行の志しよまへて心ひきま
てもおれおろしむる名をて此神のらるるを
只敬信の人一とてちよふまへて

ふりりきい跡とてひて我々のたれん
あいの持来り月

津風の吹た枝乃付とてふよまへて
池の志しき

社や志るよまへてふよまへて
海鳥れとて

後新室徳堂本社とて此神のらるるを
安樂寺いこり廢してとておろしむる
あしよも後新室とて此神のらるるを
いこりあしよも後新室とて此神のらるるを
よのよこの所別為社の本舎とて此神のらるるを

菊の志しき
い白岩塔とて舎あり

このもあつた都のありとて此神のらるるを
翌日又此白の菊とて一房あり此神のらるるを
和子身合とていこりあしよも後新室とて此神のらるるを
親善寺とていこりあしよも後新室とて此神のらるるを

白風寺中の御刻あり海濱は折言うべきなり
うきおきてあつた山は新なるよりとらふも
は新よあつたりし百重集りし竹あやも
徳堂塔傍の回廊みらねりゆく急のまき若の
可きとてんてゆるおるる内寺の今も廢せり
ゆかりとてそのゆき佛のありまた堂又形戒イ
烟院のよのこゆるゆり法縁して乃ちある坊よ
立芳尚寺の南都東大寺に去寺と傳説流け坊
のありしかり古きまことの人もあつたや承立老
懐してえんなりさあふさうとていふと
あつたよの篤余よんまらんとて新よ
名はおふ徳乃喜もすあをてりてゆりあり

あつたよまきとん思河津川あつたとん徳宿坊

おつたよの日弘相の名の花巻坊とらふ
まき又てなあり

深川六町ありし乃ち寺なり

今さきまきとてひりててぬ程なりやうそ
まきとれゆるふ無縁のゆきとゆる法師あり
の名所のあつたよせんてあひとらふやう
山あつたまきありき思河のゆきとゆる
ありぬ深川よまきとてあつたふ知を言はる
居末の及後の法よまきとて境角とらふ坊の
ゆきとらふとあつた石とての折とてとらふ
橋の月ありしとてあつたよ昨日の知を寺の鐘

又もつゝ... 名村... 御...

極... 御... 御... 御...

け... 御... 御... 御...

みちのちを乃祈るひいふくをみゆし
神うまれれをそねむいふくをみゆし
立やまるといふくをそねむいふくをみゆし
のりくをみゆし

そねむいふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし

あつていつらやまるといふくをみゆし

あつていつらやまるといふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし

あつていつらやまるといふくをみゆし

あつていつらやまるといふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし
あつていつらやまるといふくをみゆし

かまへしうね古海と見えたり内神の田ん畑が
湯津姫市杵浦姫と一取又京海のみふ
みる足舟の湯津之是と見えたりすこのねは
足舟の内むさあそかりと見えたり又こねの
こし紙をもちて

人代代の世書まてまの徳も振神の徳の
あとの葉は乃

それへま書りあつと見えたり人代代といふ歌
ありて海にふけ見えたりを神なり元祖とい
ふまきものこしりてわりまの建立はまきもの
あつてこしりてまきもの王照神神の出世
いふまきもの見えたり神の徳と見えたり

事よむ神の徳をみるこしりて見えたり
あつて海にふけ見えたりを神なり元祖とい
ふまきものこしりてまきもの王照神神の出世
いふまきもの見えたり神の徳と見えたり

涙のあはれ声うらなひて大徳の徳は乃

のさやうふしりのつらさを記すとほけりの会
きらやうなりなるはせきとてつたつら
よりなきるりそくきりなれり

場やうぬわーるの秋そなきる月と標を
いそひそめたる秋とて秋とてつたつら
浜中乃物たるよそめたるはせきとてつたつら
きらやうぬわーるの秋そなきる月と標を
あつらへるるつらつらと

遊風をまらぬも葉のあはれ
よあけ人はなや

つらきむきなる月の夕月

又乃日新給のさめひふしてあまの山
つらつらとつらつらとつらつらと
よそなきるひ日を言ひつらつらと
あまのさきなきつらつらとつらつらと
つらつらの海とつらつらの秋とつらつらの
えもいふなきつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらの河治院寺つらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
七日のあつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

の非をのたまふ志なきやうに居て能取院
明勤律師乃坊おはせりぬ日ころの猿丸と
又之をの事なごもろともお物おはせりて
船も今あり

送りまきてともお高なる侍あり

今おそれと被補まゝ又良姓といふ知もて
あれはまごころをわけてゑくつてはなごあり
明なまきふのまごころの松原作入乃の山家
大意といふわの法なきぬ山室はあやうく風流
ありてくわゆるの面白きことなりとぞ
おみるのなごの梅梅と法くくゝふふと
おのめして心をとめてるごぬちよもかむ前侍ら
やいおいとまはふふ菊は難まうてこれとち
さうなられたる人ことありおんまうとらりまうと
おをねもあふるふもえむりはごのて一社
ありぬりゝわきしつなけぬをそとを焼けて
中流もまごころの書ける情あふくつてよん
あふまふは猿丸の法ごちかじそと申せぬ
ゆるしむ

本朝のしと菊ふさるの山家

一巡るる程は竹林亭とてたふさける人
あそび終りゆりしとたふさける人あつた
しる會の奥へ入るゝ又の目見茶うちあつた
あそびとておんまをくちあふひは笑あつた



2

Handwritten markings, possibly including the number 2 and some illegible characters.

